Osaka Shoin Women's University Repository

# 琵琶湖沿岸漁村方言調査・中間報告

## ——湖東・湖北地方の魚名呼称について——

西端幸雄

## はじめに

本稿は、今年七月初旬から九月初旬にかけて行なった琵琶湖沿岸漁村方言調査の中間報告である。本調査は、五九年度に湖東・湖北地方、六〇年度に湖西・湖南地方で、琵琶湖沿岸の漁村における魚名、漁具名、漁法名、風位名、潮名等を採集することが目的である。本年度は、下記の各漁村において調査を行なった。

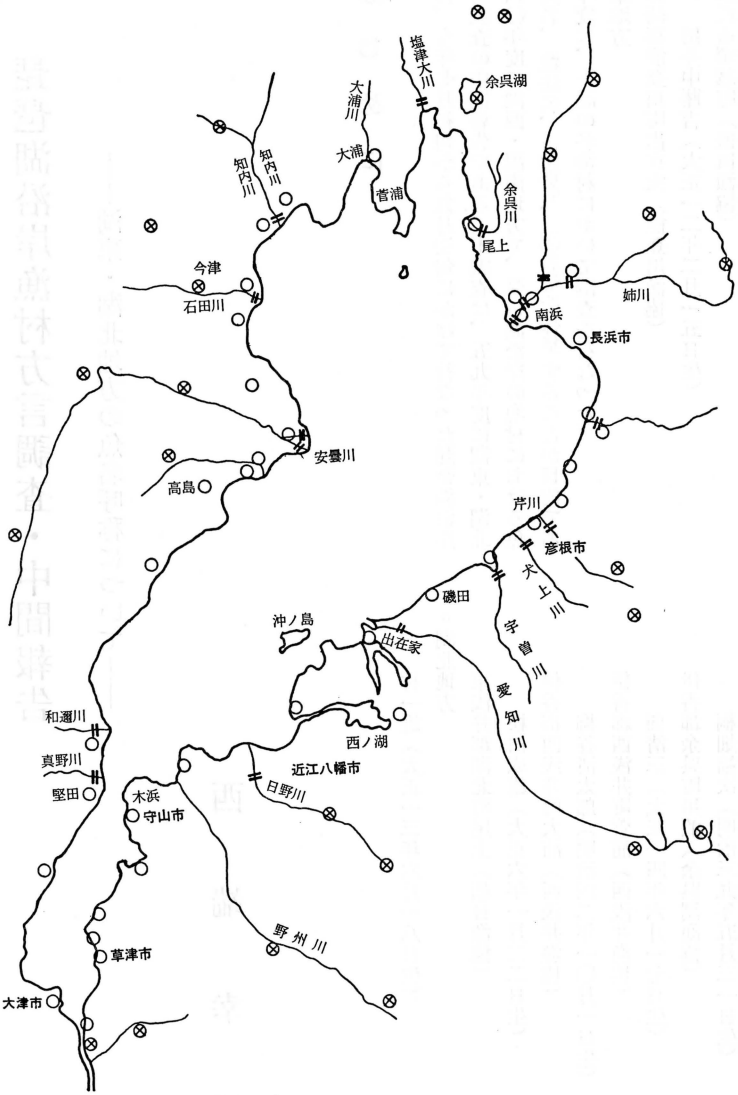
○湖東地方

神崎郡能登川町出在家（能登川漁協）
田井中藤吉（大正一二年二月一五日生）
彦根市須越町（磯田漁協）
疋田新作（大正九年六月一一日生）
林一雄（大正一三年六月一八日生）

○湖北地方

東浅井郡湖北町尾上（朝日漁協）
松田成雄（大正六年一月二二日生）
伊香郡西浅井町大浦（西浅井漁協）
柳谷清太郎（明治四二年一〇月一日生）
伊香郡西浅井町菅浦（西浅井漁協）
佃清三（大正一四年六月一七日生）
伊香郡余呉町川並（余呉湖漁協）
桐畑福次（明治三九年五月三一日生）
桐畑幸一（昭和五年二月三日生）

Osaka Shoin Women's University Repository




「滋賀の水産」より

Osaka Shoin Women's University Repository

調査方法は、魚名については、『原色日本淡水魚類図鑑』（保育社刊）を被調査者に示しながら、漁具名、漁法名、風位名、潮名等の場合には何も示さずに、質問調査法を行ない、同時に録音機にも採録した。

また、本調査協力者（被調査者）としては、長年漁業に従事している、または従事していた、原則として、六〇歳以上の上記の方々にお願いした。ここに記して、厚く御礼を申し上げる。さらに、本調査の趣旨に御理解を賜わり、何かとお手を煩わせた、各漁業協同組合の方々にも、あわせて深甚の謝意を表する。

◎

琵琶湖は、周知の通り、湖岸線総延長約二三五㎞、表面積約六七三・八㎢、滋賀県の総面積の約六分の一を占める、わが国最大の湖である。その琵琶湖には、現在二〇〇種以上の淡水魚が生息し、その魚種の豊富さでも、他の湖をしのいでいる。

また、余呉湖は、滋賀県の北部、琵琶湖とは賤ケ岳で隔てられている、周囲約六㎞、表面積一・四㎢の小さな湖である。

古来、湖国の住民と琵琶湖とのかかわりは深く、琵琶湖の魚を対象とした漁も、相当古い時代から行なわれてきた。現在、琵琶湖沿岸及び流入河川沿いには、六〇数ケ所の漁業協同組合がある。ただ、琵琶湖の漁業は、外洋のものと異なり、湖という限られた水域に生息する魚を根絶やしにすることなく、バランスを保ちながら行なわなければならないという制約がある。そのため、専業の漁民というのは、漁業協同組合員の中でもそう多くはない。

また、琵琶湖周辺の都市化、工業化、農業の近代化が急速に進み、水質汚濁の問題は、漁業に重大な影響を与えている。さらに、昭和四七年に施行された琵琶湖総合開発法に基づく諸事業により、水位の低下といった、新たな問題も生じ初めている。

こうした環境の中にある琵琶湖の漁業は、今後衰退の一途をたどることも予想されている今日、そこで語られていることばを調査し、保存することは、緊要なことではないかと思われる。

## 各漁村における魚名

今回、調査対象とした魚種は、後掲（注記参照）の四二種の淡水魚である。これらの魚種を調査対象とした基準は、第一に淡水魚の代表的なもの、第二に漁業の対象となるもの、第三に輸入魚（ソウギョ・カムルチー等）と在来魚、といったことで設けた。

ただ、四二種もの魚名について、ここで取り扱うと煩雑になるので、本稿においては、その中、特徴的な傾向がみられた二三種に限って、以下に述べることにする。

下記の一覧表をみると、六調査地点において、各魚名の呼称にそれほど大きな相違は認められない。今回の調査の準備段階では、もっと様々な呼称が各地点で行なわれているとの予測があったが、多少意外な思いがする。ただ、各地点での呼称をみると、ある程度の類型のあることがわかる。

それは、一つには、当該の魚種に類似の魚種が他に存在する場合、それぞれを区別するために、語頭に「ホン」や「マ」（いわゆる「本」・「真」の意の接頭辞か）を付けて呼ぶ例である。以下に、

**6 地点の魚名一覧表**

| | 出在家 | 磯田(須越) | 尾上 | 大浦 | 菅浦 | 余呉湖 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| スナヤツメ | | ヤツメウナギ | ヤツメウナギ | ヤツメ(ウナギ) | ヤツメウナギ | ヤツメ |
| ニジマス | マス | ニジマス | | ニジマス | ニジマス | |
| ビワマス | マス | ビワマス | マス | マス | ホンマス | |
| | | | | | シロマス | |
| アユ | アイ | アユ | アユ | アユ | アユ | |
| | | アイ | | | | |
| アブラハヤ | | アブラケ | アブラコ | | アブラメ | スベリ |
| | | | | | アブラムツ | |
| カワムツ | ムツ | ムツ | ムツ | ムツ | ムツ | ムツ |
| | | | | クソムツ | | |
| | | | | ベンムツ | | |



Osaka Shoin Women's University Repository

Osaka Shoin Women's University Repository

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| オイカワ | オイカワ | オイカワ | オイカワ | ハイ | ハヤ | オイカワ |
| | | ハエ | ハヨ | ハヨ | ハヨ | |
| ホンモロコ | モロコ | ホンモロコ | ホンモロコ | ホンモロコ | モロコ | シロモロコ |
| スゴモロコ | スゴ | スゴジモロコ | スゴ(モロコ) | スゴズ(モロコ) | スゴズ | スゴ |
| | | ゴンボモロコ | | | | スゴシ |
| | | ゴンボスゴ | | | | |
| ワタカ | ワタコ | ワタカ | ワタカ | ワタカ | ワタカ | |
| | | ワタコ | | | | |
| カマツカ | ダンギリボー | ダンギリボー | カマツカ | カマツカ | カマツカ | |
| | ダケス | カマツカ | | | ドゲンボ | |
| ゼゼラ | | エンドス | エンドス | | | ゼゼコ |
| | | ボンサン | ドス | | | |
| | | ボーズモロコ | | | | |
| ヒガイ | ヒガイ | ヒガイ | ヒガイ | アブラヒガイ | ヒガイ | ヒガイ |
| ゲンゴロウブナ | マブナ | ゲンゴローブナ | ゲンゴローブナ | マブナ | ゲンゴローブナ | ゲンゴローブナ |
| | マブ | マブナ | | | | |
| | フナ | マブ | | | | |

Osaka Shoin Women's University Repository

| | 出在家 | 磯田(須越) | 尾上 | 大浦 | 菅浦 | 余呉湖 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| タナゴ | ヒラボテ | ボテ | ボテ(ジャコ) | ボテ(ジャコ) | ボテ(ジャコ) | ボテ(ジャコ) |
| ドジョウ | ドンジョ | ドンジョ | ドジョー | マドジョー | ドジョー | ドジョー |
| | | | | ホンドジョー | | |
| シマドジョウ | シマドジョー | シマドンジョ | ドジョー | スナドジョー | ドジョー | シマドジョー |
| ギギ | ギギ | ギギ | ギギ | ギギ | ギギ | ギギ |
| | ギギタ | | | | | |
| ナマズ | ズー | ナマズ | ズナマズ | クビツク | ナマズ | マナマズ |
| オオナマズ | オーナマズ | オーナマズ | オナマズ | オーナマズ | オーナマズ | オーナマズ |
| タイワンドジョウ | タイワンドジョー | タイワンドンジョ | タイワンドジョー | タイワン(ドジョー) | タイワンドジョー | タイワンドジョー |
| | ワンコー | | | | | |
| スジエビ | | エビ | エビ | マエビ | コエビ | コエビ |
| | | | | コエビ | | |
| テナガエビ | | テナガエビ | テナガ | テナガエビ | テナガ(エビ) | テナガ |

<注> 一覧表中で、丸ガッコを付けたものは、丸ガッコを付けた部分を省略した語形も存在することを示す。

「ドジョー」「ホンドジョー」と区別して「ドンジョ」。大浦によると、ドンジョとドジョーは別種。

「ドンジョ」と区別して「ホンドジョー」。菅浦によると、ドンジョとドジョーは別種。

「ドジョー」と区別して「ドドドンジョ」。余呉湖によると、ドドドンジョとドジョーは別種。

その例を挙げると、

「ズ」　菅浦によると、ズとズーは別種。

「ズ」　余呉湖によると、ズとズーは別種。

Osaka Shoin Women's University Repository

ナマズ」

○スジエビ　大浦において、テナガエビと区別して「マエビ」

といった例がある。

また、当該の魚名の下部を省略し、「コ」や「コー」（いわゆる「公」の意の接尾辞か）を付けて呼ぶ例も若干みられる。

○アブラハヤ　尾上における「アブラコ」

○ワタカ　出在家、磯田における「ワタコ」

○ゼゼラ　余呉湖における「ゼゼコ」

○カムルチー　出在家における「ワンコー」

それに、当該の魚種独自の、または、類似の魚種と比較しての外形的特徴（色彩、形態等）でもって呼称する例も比較的多い。例えば、菅浦において、ビワマスを「シロマス」と呼ぶのは、ニジマスと比べ、体全体の色が淡いところからこのように呼ばれると思われる。また、磯田において、スゴモロコを「ゴンボモロコ」「ゴンボスゴ」と呼ぶのは、被調査者によると、他のモロコ類に比べ、その体型がごぼうのように細いところから呼ばれたということである。この点、出在家、磯田でカマツカを「ダンギリボー」と呼ぶのも同類である。

その他を以下に列挙する。

○アブラハヤ　余呉湖における「スベリ」（感触）

○ホンモロコ　余呉湖における「シロモロコ」（色彩）

○ゼゼラ　磯田における「ボーズモロコ」（体型）

○タナゴ　出在家における「ヒラボテ」（体型）

さらに、当該の魚名の一部を省略して呼ぶ例がある。例えば、タナゴ類は、琵琶湖周辺では、「ボデジャコ」と呼ぶ。今回の調査地点でも同様であったが、その一方で「ボテ」という省略した呼び方の方が一般的であるとのことであった。その他、当該の魚種の、その地点独特の呼称（方言）をさらに省略して呼ぶ場合もみられる。尾上においては、ゼゼラを「エンドス」と呼ぶが、それを省略した「ドス」という形で呼ぶこともある。また、出在家、磯田においては、ゲンゴロウブナを「マブナ」と呼ぶが、それを「マブ」とも呼ぶ。

その他を以下に列挙する。

○スナヤツメ　余呉湖、大浦における「ヤツメ」

○ニジマス　出在家における「マス」

○ビワマス　出在家、尾上、大浦における「マス」

○カワムツ　全地点における「ムツ」

○ホンモロコ　出在家、菅浦における「モロコ」

○スゴモロコ　尾上における「スゴ」大浦における「スゴズ」

○ナマズ　出在家における「ズー」

○カムルチー　出在家における「ワンコー」

○スジエビ　大浦における「タイワン」

○テナガエビ　磯田、尾上における「エビ」

○テナガエビ　尾上、菅浦、余呉湖における「テナガ」

Osaka Shoin Women's University Repository

以上のように、今回調査を行なった湖東、湖北地方では、魚名の呼称をあえて類型化しようとすれば、四つに分類できよう。

次に、少し細かく、各地点ごとに、その呼称を比べてみる。

まず、出在家と磯田には、他地点ではみられない類似の呼称が比較的多くあることがわかる。

例えば、アユを両地点とも「アイ」と呼ぶ。また、ワタカを「ワタコ」、カマツカを「ダンギリボー」、ドジョウを「ドンジョ」と呼ぶなどである。

これは、両地点が湖岸線で約一〇㎞の距離しかないという地理的な面と漁業を行なう上でお互いに交流があったという人為的な面とが影響しているように思われる。

一方、他地点と地理的に隔絶され、人的交流もあまり活発でなかった地点では、その地点独自の、特徴的な呼称がみられる。

その一つは、菅浦である。この菅浦は、前掲の地図でもわかるように、琵琶湖の北部に突き出た葛籠尾崎（つづらおざき）と呼ばれる岬の西の湾入部にある。三方を山に囲まれ、長く陸の孤島と言われ、昭和四六年、奥琵琶湖パークウェイが開通するまでは、水運か湖岸沿いの細い道でしか、近接の大浦とも行き来できなかった。

いま、菅浦における、特徴的な呼称を掲げると、ビワマスを「ホンマス」「シロマス」、アブラハヤを「アブラメ」「アブラムツ」、オイカワを「ハヤ」、カマツカを「ドゲンボ」などと呼ぶ例がそれである。

もう一つは、余呉湖である。余呉湖は、前掲の地図でもわかるように、琵琶湖の北部にある、小さな湖である。当然、琵琶湖で行なわれている漁業とは違った漁業が行なわれていて、特に人的交流は、ほとんどないとの由である。そのため、他地点にはみられない呼称が比較的多くある。

例えば、アブラハヤを「スベリ」、ホンモロコを「シロモロコ」、スゴモロコを「スゴシ」、ゼゼラを「ゼゼコ」、ナマズを「マナマズ」と呼ぶ例などがそれである。

## 主要魚種の下位分類

さて、今回調査を行なった各漁村では、各魚種を大小、雌雄、色彩、形態、時期、さらには捕獲場所などによって、下位分類して、呼称することがある。いま、調査した全魚種にわたって述べると煩雑になるので、「ウナギ」「ニジマス」「ビワマス」「ハス」「コイ」「ゲンゴロウブナ」の六種に限って、その下位分類された呼称をみることにする。

### ○ウナギ

ウナギは、主にその腹部の色彩によって下位分類されることが多い。それをまとめると、下記のようになる。

| | | |
|---|---|---|
| ○カネキチ | 大浦、菅浦 | 金色（菅浦では銀色） |
| ○シロウラ | 大浦、余呉湖 | 白色 |
| ○キウラウナギ | 大浦、余呉湖 | 黄色（余呉湖では「キウ |

Osaka Shoin Women's University Repository

。ゴマウナギ　菅浦、余呉湖　斑点

また、菅浦においては、口が大きいウナギを「カニクイ」、胴が太く、体全体が短いのを「モタレ」と呼んでいる。

**○ニジマス・ビワマス**

まず、両魚種は、それぞれを区別せず、時期によって下位分類され、九月から一二月にかけては、「アメノウオ」（出在家のみ「アメノイオ」）と呼ばれる。この語の由来は不明であるが、古く延喜式に見える。被調査者によると、産卵期に入っているため、味は悪く、魚肉は白身になっているとの由である。

また、磯田においては、ニジマスの大きいのを「マス」、小さいのを「アマゴ」と呼んでいる。一方、尾上においては、ビワマスの大きいのを「マス」、小さいのを「アマゴ」と呼んでいる。なお、両地点ともに、渓流魚のアマゴと混同しないかと、被調査者に質問したところ、琵琶湖ではアマゴは獲れないとのことであった。

**○ハス**

ハスは、まず、時期によって下位分類される。磯田においては、五月から七月にかけてのハスを「エカケバス」「エカキバス」と呼んでいる。これは、「餌」を「追い駆ける」ハスの意だそうである。また、菅浦においては、冬季のハスを「シラバス」と呼んでいる。

**○コイ**

コイは、大小、それも太い、細いで下位分類されることが多い。出在家においては、太目のを「ヤマトゴイ」、細目のを「ゴンボーゴイ」「ジゴイ」と呼んでいる。しかし、この「ヤマトゴイ」という呼称は、他地点においては、単なるコイの別称として使われている。また、磯田においては、太目のコイに対する呼称はないが、細目に対しては、出在家と類似の「ゴンボゴイ」「ゴンボー」という呼称を行なっている。さらに、尾上、大浦、菅浦においては、細目のを「トンボゴイ」と呼んでいる。これは、トンボのように細い体型をしているところからの呼称であるという由である。

**○ゲンゴロウブナ**

ゲンゴロウブナは、まず、大小によって下位分類されるが、その呼称は、各地点で様々である。それをまとめると、下記のようになる。

| 調査地点 | 大 | 小 |
|---|---|---|
| 出在家 | ハチ | ヘラ、ガンゾ |
| 磯田 | | ガンゾ |
| 大浦 | | ガンゾ |
| 菅浦 | テリブナ | マブナ、ニゴロブナ |

Osaka Shoin Women's University Repository

ただ、上記の中、小さいのを「ガンゾ」と呼ぶのは、琵琶湖周辺に一般的に行なわれている呼称で、多くの場合、ゲンゴロウブナに限らず、フナ類全般の小さいのを呼んでいる。また、出在家において、ゲンゴロウブナの小さいのを「ヘラ」と呼んでいるが、この「ヘラ」は、ゲンゴロウブナの別称「ヘラブナ」の省略形と思われる。なお、磯田においては、ゲンゴロウブナの雄を「ヘラ」と呼んでいる。さらに、菅浦においては、ゲンゴロウブナとは別種のフナの魚名であるはずの「ニゴロブナ」をゲンゴロウブナの小さいものに対する呼称に使っている。そして、いわゆるニゴロブナは、「ニゴロ」という省略形で呼んでいる。同じく、菅浦において、ゲンゴロウブナの小さいのを「マブナ」と呼んでいるが、この「マブナ」は、例えば、尾上においては、ニゴロブナの大きいのに対する呼称に使っている。また、磯田においては、ゲンゴロウブナの雌に対する呼称に使っている。その上、マブナという魚名は、ゲンゴロウブナとは別種のキンブナ、ギンブナの別称として、本来使われているものである。また、菅浦において、ゲンゴロウブナの大きいのに対する呼称として使っている「テリブナ」を、大浦においては、日照りの時に獲れるゲンゴロウブナの呼称に使っている。

以上の他、わずか一例ではあるが、捕獲場所によって下位分類される例がみられる。尾上においては、ゲンゴロウブナを「オーウラ」と呼ぶことがある。これは、調査地点の一つである大浦を表わし、ゲンゴロウブナが大浦の湾でよく獲れることから、このような呼称をする由である。

このように、各魚種の下位分類による呼称をみてみると、ここに十分まとめきれなかったが、上記の六種の中でも、漁民にとって儲かる魚種、利益の大きい魚種ほど、その下位分類による呼称が様々であることがわかる。つまり、そうした魚種に対する漁民の注目、関心の度合が高く、その結果、魚の成長、雌雄の別、色彩の違い等で区別する必要が生じたものと思われる。

## おわりに

以上、非常に粗雑な報告を行なったが、今回調査した湖東、湖北地方の漁村、六地点の魚名呼称について、一応の傾向はまとめられたのではないかと思う。ただ、各地点での調査が、わずかに一日か一泊二日程度であったため、まだまだ、調査に遺漏があるかと思われるし、また、今回の調査に御協力いただいた八名の方々の貴重な御教示を、ここに誤りなく伝え得ているか、不安に思う。

今後の課題としては、当該の各漁村において用いられている魚名に関する語彙、さらには漁業全般に関する語彙をより綿密に調査することにより、その語彙体系を明らかにしていきたい。また、今回、琵琶湖と余呉湖という近接した湖における魚名の比較を試みてみたが、今後は、他地域の湖における魚名との比較を行なうことも興味ある問題を提起してくれるのではないだろうか。さらに、冒頭

Osaka Shoin Women's University Repository

に記したように、今回、調査した湖東、湖北地方に限らず、湖南、湖西地方にも調査を広げることによって、琵琶湖沿岸漁村の漁業に関する方言分布をも明らかにしていきたい。

なお、末尾ながら、本調査を行なうにあたり、貴重な資料を御提供下さいました滋賀県教育委員会文化財保護課の長谷川嘉和技官に対しまして、深甚の謝意を表します。

（注記）

今回、調査対象とした魚種は、下記の四二種である。

- ヤツメウナギ科　スナヤツメ
- ウナギ科　ウナギ、オオウナギ
- サケ科　ニジマス、ビワマス
- キュウリウオ科　アユ
- コイ科　ウグイ、アブラハヤ、カワムツ、オイカワ、ハス、ホンモロコ、スゴモロコ、ワタカ、ソウギョ、カマツカ、ゼゼラ、ヒガイ、モツゴ、コイ、ゲンゴロウブナ、ニゴロブナ、キンブナ、ギンブナ、タナゴ、ニゴイ
- ドジョウ科　アユモドキ、ドジョウ、シマドジョウ
- ギギ科　ギギ
- ナマズ科　ナマズ、オオナマズ、イワトコナマズ
- メダカ科　メダカ
- タイワンドジョウ科　カムルチー、タイワンドジョウ
- カジカ科　カジカ
- ハゼ科　ドンコ、ヨシノボリ、イサザ
- テナガエビ科　スジエビ、テナガエビ

（各科の分類は、「原色日本淡水魚類図鑑」（保育社刊）によった。）